

さわぎや通りの 子どもたち



リント・グリーン 作

山室 静 訳

児童文芸 絵

さわぎや通りの子どもたち

現代世界名作童話 3

N. D. C. 949 講談社 152pp 23cm

昭和44年11月4日 第1刷発行

作 者 アストリッド＝リンドグレン

訳 者 山 室 静

発行者 野 間 省 一

発行所 株式会社 講談社 © 1969

東京都文京区音羽 2-12-21

郵便番号 112

電話 東京 (942) 1111 <大代表>

振替口座 東京 3930

印 刷 凸版印刷株式会社

製 本 凸版印刷株式会社

定価 590円

落丁本・乱丁本はおとりかえいたします。 Printed in Japan

(分) 8-3-97 (製) 228534 (出) 2253 (0)



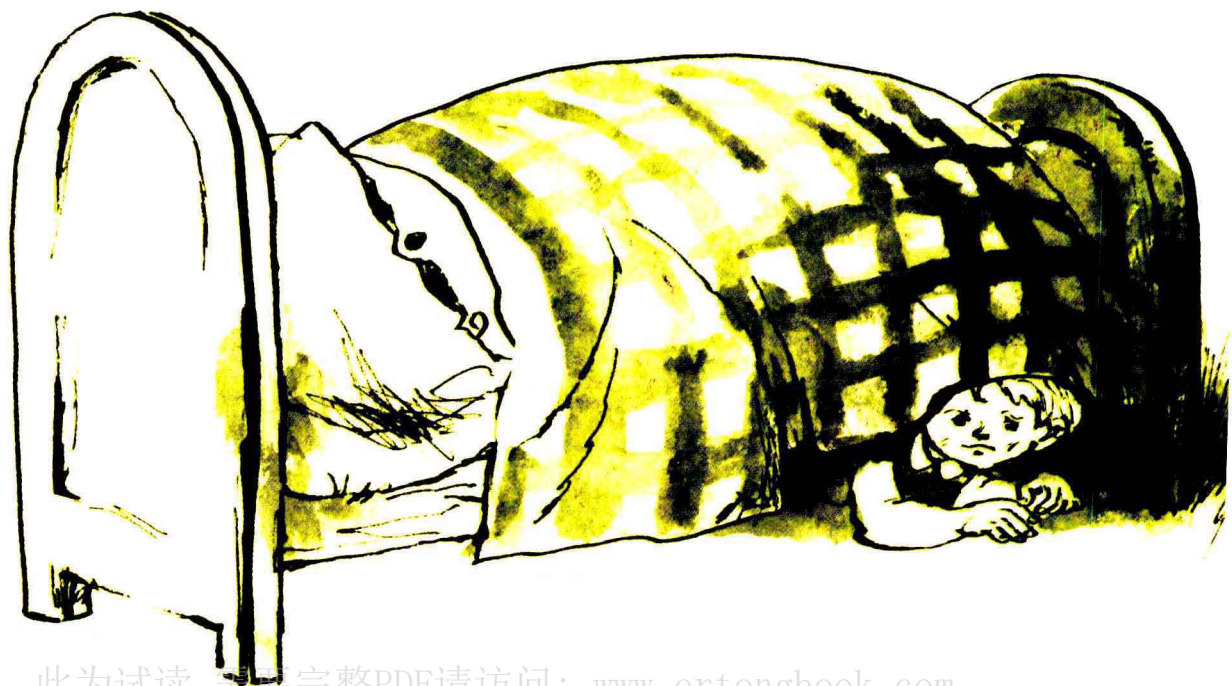


さわぎや通りの 子どもたち

アストリッド＝リンドグレーン 作

山室 静 訳

桜井 誠 絵



もくじ

7	わたしたちはヨナスとマリヤとロッタよ.....	9
2	あそんで あそんで またあそぶの.....	18
3	ほんとにかわいい ごうじょうやさん.....	29
4	おとなりのベルイおばさんのところで.....	41
5	おばさんはせかいでいちばんいい人よ.....	49
6	うちじゅうで みずうみへピクニック.....	56
7	ロッタのいちばん楽しかったことったら.....	66



8 この夏も おばあさんのうちにいったの……………75

9 大きな木の上の「みどりのべっそう」で……………87

10 ロッタったら「ちえっ ちくしょう。」なんていうの……………96

11 「きょうはあたいの文なし日」ですって……………102

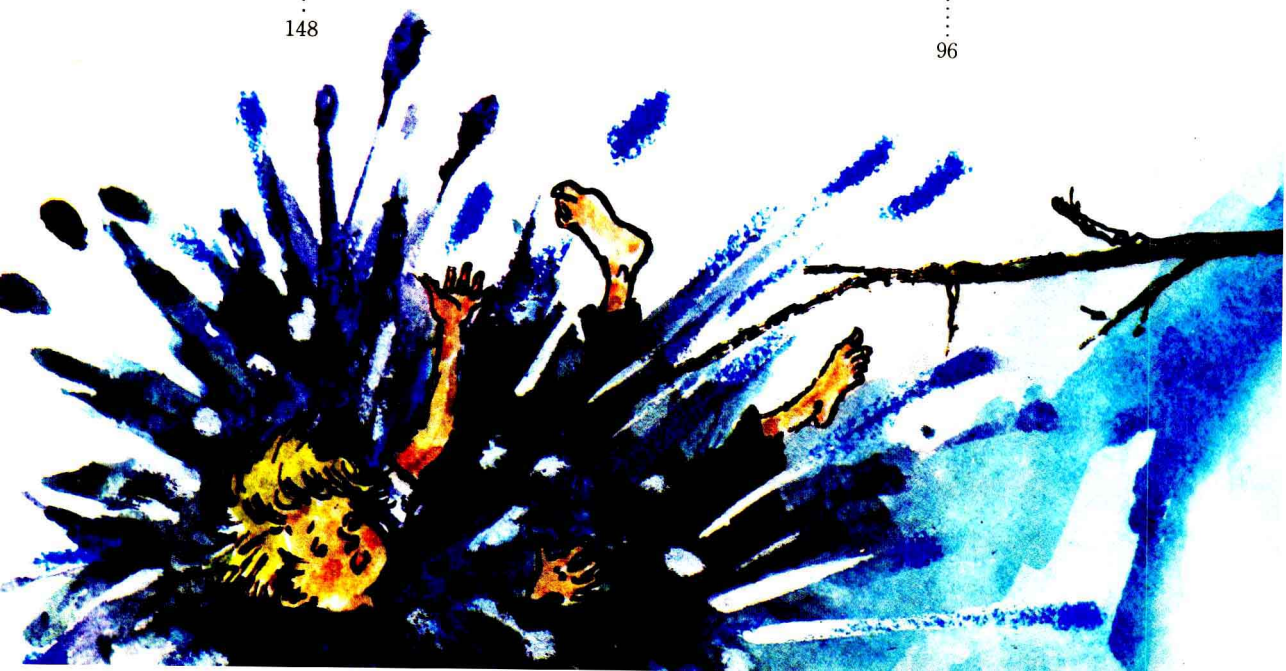
12 黒んぼのどれいになって 大どくい……………113

13 やさしいやさしいロッタ……………120

14 ほんとうにおもしろい思いつきだわ……………127

15 楽しいクリスマスイブ……………135

あとがき……………148



さわぎや通りの
子どもたち



わたしたちは ヨナスとマリヤとロツタよ

わたしのにいさんはヨナスで、わたしはマリヤで、小さい妹いもうとはロツタっています。
ロツタは、やっと三つのおたんじょう日びをすぎたばかりなの。

パパがいうには、うちに子どもがいないときは、まるきりしずかだったんだそうです。
ところが、いまでは、とってもやかましくなったの。

わたしのにいさんは、そりゃ、わたしより先に生うまれたわ。それで、パパはいうの……
ヨナスがすこし大おおきくなって、ベッドのふちを、ぼうでぶてるようになるが早いはやか、家の
中なかでやかましい音おとがはじまったって。

日曜にちようび日の朝あさの、パパがもっとねていたいときでもよ。

それからというもの、ヨナスに赤ちゃんは、ますますやかましい音^{おと}をたてるようになったわ。だからパパは、にいちちゃんのことを「でかドタバタ」っていうの。

それから、わたしのことは、「ちびドタバタ」っていうわ。だって、どんなにしても、わたし、にいちちゃんほど大きな音^{おと}はたてられないんですもの。それに、わたし、ときには長いこと、おとなしくしてるときだってあるわ。

そのうちに、もうひとり赤^{あか}ちゃんができたの。それがロツタよ。パパは、どうしてだか知らないけど、あの子^このことは、「ちっちゃいもんくやさん」ってよぶの。

でも、ママは、わたしたちのことを、名^なま



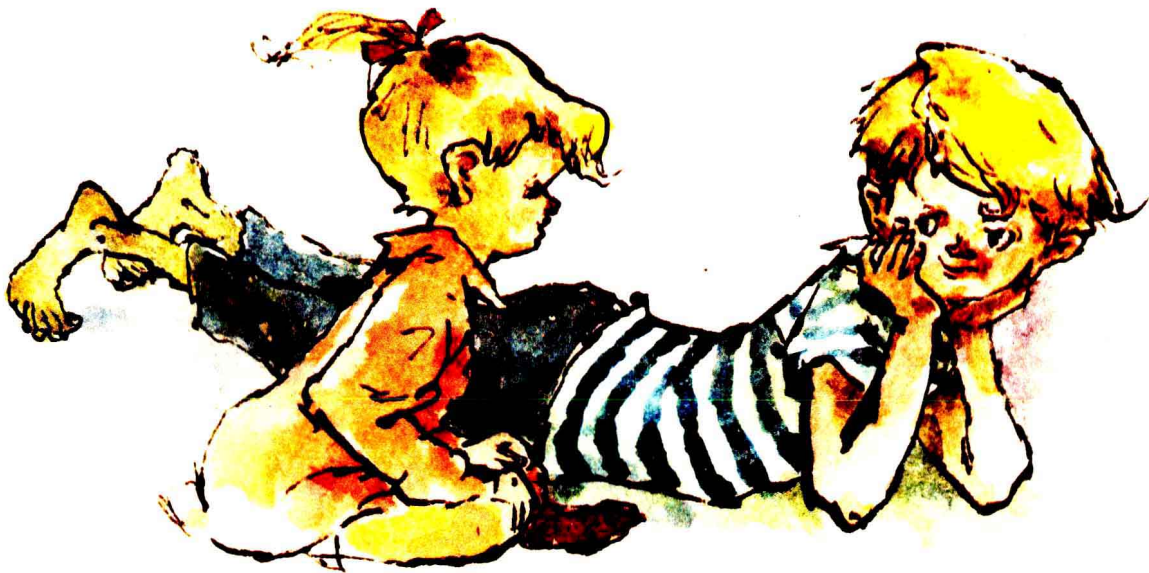
えのとおり、ちゃんと、ヨナス、マリヤ、ロツ
タってよびます。わたしのことは、ちょい
ちよい、「ミアマリヤ」(わたしのマリヤ)と
もよぶわ。それで、ヨナスにちゃんもロツ
タも、そのまねをして、わたしのことを「ミ
アマリヤ」っていうんだわ。

わたしたちがすんでるのは、つぼや通りと
いう小さい通りの、黄色くぬった家です。

「この通りには、前には、つぼ作りの人がす
んでたんだろうね。だけど、いますんでるの
は、さわぎをやらかす人間ばかりさ。さわぎ
や通りって、名まえをかえるといいんだ。」

そうパパはいうの。

ロツタったら、ヨナスにいちゃんやわたし



ほど^{おお}大きくないのが、とてもふまんです。

にいちゃんとわたしは、ひとりでマーケットまでいってもいいけど、ロッタはだめなの。

ヨナスにいちゃんとわたしは、土曜日^{どようび}にはマーケットにいった、そこにお店^{みせ}を出^だしているおばさんから、ボンボンを買^かうの。でも、ロッタにも、ボンボンはもってきてやるわ。そうしなかったら、たいへんですもの。

いつか、土曜日^{どようび}に、ひどく雨^{あめ}がふって、そのときは、とてもマーケットにはいけそうもなかったわ。

それでもかまわず、わたしたちは、パパの大きなこうもりがさをきいて、赤い^{あか}ボンボンを買^かったの。帰^{かえ}るとちゅう、大きなこうもりがさの下^{した}でボンボンを食べ^たたら、とてもおもしろかったわ。

ところが、ロッタは、そんなにひどく雨^{あめ}がふるもんだから、中^{なか}にわまでも出^だしてもらえなかったのよ。

「なぜ、雨^{あめ}なんかふらなくちゃいけないのよ。」

そういってロッタが聞^きくと、ママは答^{こた}えました。

「おむぎやおじゃがが、よくのびるようによ。でないと、どっさり食^たべられないもの。」
すると、こんどは、ヨナスにいち^きちゃんが聞きました。

「でも、なぜ、マーケットにまでふるのさ。雨^{あめ}がふったら、ボンボンが^{おお}大きくなるの？」
ママは、ただわらっただけでした。

夜^{よる}になって、わたしたちがベッドにはいったとき、ヨナスにいち^きちゃんが、わたしにいいました。

「ねえ、ミアマリヤ、こんど、おじいさんとおばあさんのところへいったら、ぼくたちの花^かだんに、にんじんじゃなくて、キャラメルをうえてみようか。そのほうが、ずっといいもの。」

「そうね。それで、もし雨^{あめ}がふらなかつたら、わたしの小^{ちい}さい青^{あお}いじょうろで、水^{みづ}をやればいいわ。」

と、わたしはいいました。

「だけど、にんじんのほうが、はにはいいのよ。」

いなかにいるおじいさんとおばあさんのところにおいてある、わたしの小^{ちい}さい青^{あお}いじょう

ろのことを思いついたので、わたしはすっかりうれしくなりました。じょうろは、ちゃんと地下室のたなにのせてあるわ。

わたしたち、夏になると、いつでも、おじいさんとおばあさんの家に行くの。

いつだったか、おじいさんとおばあさんの家で、ロッタが、どんなことをやらかしたと思っ……。

そのこのなやのうしろには、大きなたいひの山があるの。そのたいひは、ヨハンソンおじさんが、はたけにはこんでいてまくんだわ。むぎややさいが、よくできるように。

「なぜ、たいひなんかこしらえるの。」

こういってロッタが聞くと、パパはいったわ。

「たいひを下にしいてやると、なんでもよくのびるからさ。」

すると、ロッタがいったの。

「雨だってふらなくちゃだめでしょ。」

ロッタは、そのすこし前の土曜日に、雨がひどくふったとき、ママのいったことを思い出したのよ。それを聞いて、パパはいいました。

「よく知ってるね、ちっちゃいもんくやさん。」

